

Summa Theologiae I, 44, 1 — 2 について

日 下 昭 夫

トマスが *causa universalis* の立論に先立ってその歴史的素描を試み、プラトン・アリストテレスの占める位置に言及すること再三であるが、⁽¹⁾そこではトマスのプラトン・アリストテレスの評価そのものに一貫性が欠けているため、その真意を汲むのに当惑させられることが少なくない。この点をめぐっての見解が許多生れた所以でもある。ただし、この種の解釈に往々伴い勝ちの、一種強弁を取って辞さない安易な割り切りかたが、実はこの場合にもそのまま持ち込まれ、そのことが却って問題を深め再検討の余地を残す結果ともなっている。いまの課題とするところはしかし、その正面切った再検討というものではない。ここではそれへの準備的考察として、トマスが理解しようとしたプラトン特にアリストテレスに焦点を絞り、それに伴う問題点のひとつに触れてみたいと思う。

トマスのプラトン・アリストテレス評価に喰違いが見られる例として、*De potentia* 3,5 と *Summa Theologiae* I, 44, 2 とがよく引合いに出される。*De potentia* 3,5 でトマスは、プラトン・アリストテレスが初めて *ipsum esse universale* に考察を及ぼし万物の *causa universalis* を樹立できたといひ、*fides catholica* の立場に近ずけておきながら、⁽²⁾*Summa Theologiae* I では、*ens* を或る特殊な面からしか考察していないため事物の *causae agntes particulares* にしか想到しなかったとされているだけで、⁽³⁾先の評価とは大きな隔たりを見せている、というのである。

この喰違いの解決策として誰しも思いつくことは、*Summa Theologiae*

I,44,2 をトマスの真意ととり、De potentia 3,5 はトマス自身これを放棄したとする見方であろう。⁽⁴⁾トマスがもし Summa Theologiae I,44,2 で De potentia 3,5 の行き過ぎを自ら訂正したものとすれば、以後再びこれを採り上げることはなかった筈である。が実際は外ならぬ Summa Theologiae I,2,3;6,5;44,1で繰返され、In VII Phys., lect,2, De substantiis separatis,cap.7にもそのまま再現されているのである。その点如何に説明されようか——。この提案はむしろ単なる思いつきに過ぎず、何ら積極的な意味を持ち得ないであろう。とすれば、トマス自身何らかのかたちで両者を同時に主張し得るとの確信を持っていたと解する外はない。

De potentia 3,5 と Summa Theologiae I,44,2 とを同時に主張し得たということは、De potentia 3,5 の論旨が Summa Theologiae I,44,1 に再び見出されることから、問題を Summa Theologiae I,44,1—2 (以下それぞれ〈1〉、〈2〉と略記) の関係に置き換えることによって決定的な保証が得られるであろう。〈1〉と〈2〉の関係についてはすでにカエターヌスの論及するところであり、ラグランジュのそのまま踏襲するところでもあった。それによれば、〈1〉で *Utrum sit necessarium omne ens esse creatum a Deo* と問われる際、その *omne ens* とは神以外のすべてを指すのではなく本来の意味で *ens* といわれるものに限られる。トマスのいう *necesse est dicere omne quod quocumque modo est, a Deo esse* にしても、*omnis modus entis · constitutivus cuiuscumque generis* のことで *communis modus quo ens distinguitur per actum et potentiam* のことではない——つまり *omne quod est quid, quale vel quantum etc.* であって *omne quod est actu vel potentia* ではない。その理由として、もしそうでなければ *materia prima* の起源を取扱う 〈2〉 の論述全体が無意味になるというのである。つまり 〈2〉 では、本来の意味で *ens* とはいわれない *materia prima* 即ち *pars entis materialis* の起源だけに限って、〈1〉とは独立に新たな問題提起がなされていると見るわけである。⁽⁵⁾その意味では、〈1〉と〈2〉とは、その取扱

う主題の例から或る種の整合性が得られることになる。カエターヌスのこの解釈はしかし、ラグランジュのそれを含めて、一見鮮かに見えはしてもその実それほど説得力を持ったものとはいえない。〈1〉の *omne ens* にせよ *omne quod quocumque modo est* にせよ、ただそれだけでは上述のような或る種の条件をつけて理解すべき何らの理由も存しないのであって、かかる規定はただ〈2〉の存在理由を保たんとする意図に動機づけられてのみ可能であったに過ぎない。後述の意味内容から問題連関を辿って前述の意味内容を逆に規定しようとするものである。その手続きは翻って *Summa Theologiae* の論述形式に照らしてこれを見るならば、無条件に妥当であるといわれ得ないであろう。その論述は順を追って進められているのであって、ひとつの論述の真の意味内容が後述のそれから推して初めて理解されるということとは、少なくともトマスの意図とはいえないからである。

この手続きがかりに許されたとしても、In VIII Phys., lect. 2 におけるトマスのアヴェロエス批判を見ると、この一種器用な技巧の上に立った割り切りかたに些少なれぬ制約が加えられよう。トマスは、アヴェロエスがアリストテレスの所論——どんな *κίνησις* にも *τὰ πράγματα τὰ δυνάμενα κινεῖσθαι* が先在していなくてはならないとする⁽⁶⁾——から *primum agens universale* 否認の態度に出ていることに言及し、その誤謬を是正するに同じアリストテレスを引合いに出してくる。トマスはここでいかなる *motus* も *subiectum* を前提するということが直ちに *primum agens universale* の否定に連るものでない所以を——*primum agens universale* とは何も前提なしに *totum ens* を生み出す *agens* のことでその *productio* は *motus* でもなければ *mutatio* でもなく一種の *simplex emanatio* であるから、*subjectum* を前提しその *productio* も *motus* であり *mutatio* でしかないような *agens*、つまり *agens particulare* とは同列に論じ得ないというかたちで——示した後、⁽⁷⁾アヴェロエスの依拠せるこの個所は、*agens particulare* についてのみ妥当することを附言している。⁽⁸⁾のみならず、*primum*

agens universale についてもアリストテレスそのひとの趣旨に即しているというのがトマスの見解であった。⁽⁹⁾ アリストテレスを武器とするアヴェロエスの批判に同じアリストテレスを以てしているが、それはアヴェロエス批判に、より効果を挙げるための計算がなされてのことかとも疑われる。この際トマスの典拠としているのは *Metaph., α, 1 993b24ss* で、これはアリストテレスの文面そのものからは一応離れ自由に再構成されるのが常であるが、⁽¹⁰⁾ この個所では、*maxime ens* がすべての *existentia* の *causa essendi* であるというかたちで導入され、そこからトマスは *materia prima* も例外ではないという帰結を導き出し⁽¹¹⁾ くる。トマスは更にそこへプラトンの趣意を織り込み、プラトンとアリストテレスにして初めて *totum esse* の *primum principium essendi* を考察できたことを附言⁽¹²⁾ している。

以上 In VIII Phys., lect.2 におけるトマスのアヴェロエス批判を通して見てきたことを考慮に容れて〈1〉に眼を移せば、問題は自ら明らかであろう。アヴェロエス批判に見られるトマスのこの趣意が〈1〉において殊更回避されたと断ずることは早計といわなくてはならないようである。〈1〉は内容においてこれと直結するのみならず、アリストテレスの前掲の引用がここにも見られるからである。〈1〉においては従って、*materia prima* の *productio* を含めた *productio universalis entis* が暗黙裡に了解されていると見做しても許されないことではないように思われる。少なくとも〈2〉が、本来の意味で *ens* といわれぬ *materia prima* つまり *pars entis materialis* の起源を問題にするというただそれだけの理由から、特にこの面を除外して〈1〉を理解しなくてはならない必然性は出てこないであろう。

——この際、In VIII Phys. (1263—1271) と *Summa Theologiae* I (1266—1268) の執筆年時が略々相覆うとされている点も考慮に容れておいてよ⁽¹³⁾ い。

以上によって明らかになったのはしかし、〈1〉においても *materia prima* の *productio* を含む *productio universalis entis* の趣旨が読み取られ

得るということのみであり、〈2〉との関係については、抑々の出発点にかえったことになる。この *productio universalis entis* を手懸りとして〈1〉と〈2〉の関係に再び眼を向けてみよう。これまで見てきたように、トマスがプラトン・アリストテレスにおいてこの *productio universalis entis* を立論し得たのは、*maxime ens* が *omne ens* の *causa* たることを論旨とする *Metaph., α, 1, 993b24ss* に $\eta\ \tau\omicron\upsilon\ \acute{\alpha}\gamma\alpha\theta\omicron\upsilon\ \iota\delta\acute{\epsilon}\alpha$ ⁽¹⁴⁾ の思想内容を活かし得たためといってよい。ペギスはこれをトマスがプラトン・アリストテレスに負う基本的な *principle* として重視し、*secundum sententiam Platonis et Aristotelis* というかたちで *theologia naturalis* を構築できたのもこの *principle* の上に立ってのことと見ている。そしてかれら自身に関する限りは、その *principle* は未展開に終ってその帰趨全体が尽くされるには至らず、〈1〉を含めその関係個所でかれらの主張とされていることは精々理論構成ないし論証法において理解するべきであると考え。この *principle* はプラトン・アリストテレスの真に活用するところとはならず、そこに *esse* が導入されることによって初めて完全な展開を見たというのである。ペギスは、かれらが *esse* の立場に想到しなかった所以をその *abstractionism, physicism* に帰し、それをトマスそのひとの見たプラトン・アリストテレスとした上で、〈2〉はその事実の指摘ないし評価と見ている。〈2〉は、〈1〉におけるプラトン・アリストテレス評価から予想される誤解——そこから直ちにかれらを *creatio* 理論の提唱者とするような——を避けるため、トマス自身がこれに添えた謂わば但書きと考えるのである。⁽¹⁵⁾

ヂルソンについてこれを見るならばその論旨が一層明らかになろう。ヂルソンもまた〈2〉からトマスの真意を汲み取り、そのプラトン・アリストテレスをトマスの解したかれらの真姿として浮彫りにしようとするのであるが、それによると、アリストテレスが *causa totius esse* に論及し得たといっても、厳密な意味での *esse* の賦与、つまり *creatio ex nihilo* をいうのではなく、*être existentiel* から区別された *être substantiel* の枠内でいわ

れたものとされる。トマスは *causa totius esse* に想到した功積をプラトンとアリストテレスに帰すのを常とするが、この場合の *totum esse* とは、*être substantiel total* つまり *matière* と *forme* とからなる *composé complet* の意味に解さなくてはならない、とヂルソンはいう。〈1〉が即ちそれで、〈2〉はトマス独自の *esse* の立場からする正しい意味規定とされる。*causa totius esse* といってもそれはアリストテレス流の *être substantiel* の領域でいわれたもので、トマス独自の *être existentiel* ないし *acte d'exister* の領域でいえば、*causa agens particularis* に外ならないとし、同一のものを異った領域から見たものと解するのである。⁽¹⁶⁾

こうした解釈には可成り説得力がありこの問題に貢献するところも少なくない。或る意味では決定的な線が打ち出されているとも考えられる。しかしこの図式では割り切れない面がトマスの論述過程に用意されていることも看過し得ないであろう。ヂルソン・ペギスがトマスを通して理解し得たと信ずるプラトン・アリストテレスが、トマスそのひとの描き出そうとしたかれらの *Bild* と全面的に符合するとい切ってしまうには少なからぬ抵抗のあることを認めなくてはならない。

すでに見たように、In VIII Phys., lect.2 では、何ものをも前提せずして *totum ens* を生み出す *primum agens universale* が *secundum intentionem Aristotelis* というかたちで持ち込まれた。⁽¹⁷⁾ *maxime ens* がすべての *existentia* の *causa essendi* であることをアリストテレスの所論として引用し、*materia prima* もその *maxime ens* に由来するという帰結がそこから出てくることをトマスは示しているのである。⁽¹⁸⁾ これはアリストテレスの立場の帰趨を見越しての一種の拡大解釈と見做されもしようが、この場合の重点はむしろ、アリストテレスへの言及が敢えてここに行われているという事実である。しかもその言及は単にその場限りのものではなく、アリストテレスの *Bild* を明確なかたちに仕上げるための用意を論述過程そのものに織り込みながら、かれらの論旨に一貫性を持たせようとし

てのことである。トマスはここで、いかなる *motus* も *subjectum* を要するとするアリストテレスの所論を、*agens particulare* についてのみ妥当するものとしてそのまま踏襲しながら、*productio universals entis* は *motus* でも *mutatio* でもなく一種の *simplex emanatio* であるとし、これを更に *Metaph., α, 1, 993b24ss* に訴えてアリストテレスそのひとに帰そうとさえしている。⁽¹⁹⁾ のみならず、アリストテレスのいうように *ab aeterno* としての性格を持つと仮りにされても、何か *subjectum* を前提するということは必然でないのみならず、不可能であることも附言しているのである。⁽²⁰⁾

②にもどって仔細にこれを見るならば、ここでプラトンとアリストテレスが引合いに出されているのは、実は、*materia* を *subjectum* として前提する *causae agentes particulares* の領域で、しかもその範囲だけに限ったことである点に気が付くであろう。事実、ここに導入されているのは *ἰδέα*⁽²¹⁾ とか *ἡ κατὰ λογὸν κέκλον*⁽²²⁾ とかいった中間的存在だけなのであって、もしトマスがこれを以てかれらの全貌を尽くそうとしたのならば、プラトンから *ἡ τοῦ ἀγαθοῦ ἰδέα* とその趣旨を抹殺し、アリストテレスからは *Metaph., α, 1, 993b24ss* に基く *αἴτιον τοῦ εἶναι* としての神、*πρῶτον κινῶν* としての神を抹殺したことになる。これがトマスの本意だったとは考えられない。トマスは現に、*ὄντα* ないし *ἀπλῶς ὄντα* が常に何らかの *ὑποκείμενον*⁽²³⁾ から生ずるとするアリストテレスの所論に対して、アリストテレスがここで論じているのは *fieri particulare* についてであるといっており、他面 *materia* の起源に連関して *principium universale essendi* からの *emanatio* にも論及している。⁽²⁴⁾ この *emanatio* が *In VIII Phys., lect.2* でアリストテレスの所論に帰せられていることは既に見た通りである。

トマスがこうした仕方ではプラトン特にアリストテレスにおいて読み取り得たということは特筆されてよい。Sententiae 註釈当時、*causa motus* としての *agens naturale* と *causa esse* としての *agens divinum* というかたちでその発想をアヴィセンナに得、専らこれに依拠していたようである

(25) が、それ以後は殆んど見られなくなっている。それは恐らく、アヴィセンナ体系の吟味と相俟って、この点に関するアヴェロエスのアヴィセンナ批判を意識したためであり、同時にアリストテレスそのひとにおいてこれを確認し、アリストテレスを楯にして、同じアリストテレスを武器にするアヴェロエスのアヴィセンナ批判を逆に迎え撃つ用意もすでにできていたためであろう。

このように見てくるならば、トマスは、*primum agens universale* と *agens particulare* とをアリストテレス自身——プラトンを含めて——において峻別しながら同時に共存すべきことを確認した上で、かれらの *Bild* を明確なかたち仕上げていっていると考えるべきであろう。とすれば、〈2〉をトマスの真意と取り、〈1〉から予想される誤解を避けるための但書きとする見方も、*être substantiel* の立場でいわれた〈1〉の、*être existentiel* の立場からする厳密な意味規定とする提案も、トマスの意図そのものからは離れているといわなくてはならない。

ところで、〈2〉におけるプラトン・アリストテレスへの言及が、*causae agentes particulares* の領域に限った上でのものであるとすれば、その占める位置が改めて問われるであろう。抑々プラトンとアリストテレスが引合いに出されているのは、すでに見たように、*ideae* と *obliquum circumum* についてだけなのであって、*mutationes substantiales* の *causae* としてそれが当てられているだけのことも解される。少なくともこの文面だけからは、そこにプラトンとアリストテレスの全貌が尽くされているとする必然性は出てこない。とすれば、トマスはかれらを *universalis causa entium* の提唱者の立場から排除しないだけの柔軟性を論述過程そのものに織り込んでいとも考えられる。かれらを敢えてそこに含蓄させたとしても、これまで見てきたトマスの筆法からいって、何ら唐突の感を与えるものではなく、むしろ自然とさえ思えるのである。トマスがプラトン・アリストテレスへの言及をその *ideae* と *obliquum circumum* に限ったこと自身その伏

線ともいえようし、*universalis causa entium* の論述における用語法・思考法とともにアリストテレスに負っている点も併せて考慮に容れてよい。

トマスがプラトン・アリストテレスを *universalis causa entium* の提唱として明言しなかった点については、この個所では *materia prima* の起源が正面切って問題にされている点を考慮して、問題の性質上敢えて慎重を期したものと見るべきであろう。かれらの主張は、事実上それと相容れないものとして当時一般に周知されていたことで、その点トマス自身充分意識していたと考えられる。この問題が更めて取上げられているのも、実はかかる意識あってのことで、トマスの意図を併せて考えるとき、〈2〉は *materia prima* の起源に焦点を絞り、〈1〉の内実をそのまま再叙述したものということになるであろう。

以上のように見てくると、トマスが〈2〉で所謂 *reverend interpretation* のヴェールを剥いで裸のプラトン・アリストテレスを描き出しているとするのは行き過ぎといわなくてはならない。トマスの常に念頭にあった *reverend interpretation* がここでも例外でもなく、トマスのプラトン特にアリストテレスに対する態度を示す好個の一例とさえ見做すことが許されよう。けだし、トマスがアリストテレス解釈で意図したことは、アリストテレスの所説から信仰の教義に合った点だけを摘出することではなく、それが如何に解説さるべきかに在ったからであり、その理論展開の帰趨をアリストテレスそのひとにおいて可及的に顕示することだったからである。

註

- (1) Cf. *De Potentia* 3, 5; *Summa Theologiae* I, 44, 2; In VIII Phys., lect. 2, n. 975; *De substantiis separatis* cap. 7.
- (2) *De Potentia* 3, 5, Resp.: *Posterioribus vero, ut Plato, Aristoteles et eorum sequaces, pervenerunt ad considerationem ipsius esse universalis; et ideo ipsi soli posuerunt aliquam universalem causam rerum, a qua omnia alia in esse prodirent, ut patet Augustinum. Cui quidem sententiae etiam catholica fides consentit,*
- (3) *Summa Theologiae* I, 44, 2, Resp.: *Ulterius vero procedentes, distinxerunt*

per intellectum inter formam substantialem et materiam, quam ponebant incretam; et perceperunt transmutationem in corporibus secundum formas essentialis. Quarum transmutationum quasdam causas universales ponebant, ut obliquum circulum, secundum Aristotelem, uel ideas, secundum Platonem. --- Utrique igitur consideraverunt ens particulari quadam consideratione, uel in quantum est hoc ens, uel in quantum est tale ens. Et sic causas agentes particulares assignaverunt.

- (4) Cf. J. Maritain, *La philosophie bergsonienne*. Paris, P. Tequi, 1930, P.426, なお、トマスの歴史的叙述は定見を欠き不明確性を多分に残しているとする見方もある。cf. A.D. Sertillanges; saint Thomas, *Somme theologique: La Création* (1^a Questions 44-49), Paris, Declée 3^e ed., 1948 p.237.
- (5) S. Thomae Aquinatis Opera Omnia t. IV, Pars Prima Summae Theologiae cum commentariis Thomae de Vio Caietani, ed. Leonina, Romae 1881, p. 456a Commentaria C. Caietani, I, III.
R. Garrigou-Lagrange; *De Deo Trino et Creatore*, Marietti, 1951, p.226.
- (6) Arist., *Phys.*, *θ*. 1, 251^a 10
- (7) In VIII *Phys.*, lect. 2, M.974: Manifestum est enim quod potentia activa particularis praesupponit materiam quam agens universaliter operatur. --- Ex hoc ergo quod omne particulare agens praesupponit materiam quam non agit, non oportet opinari quod primum agens universale, quod est activum totius entis, aliquid praesupponat, quasi non causatum ab ipso. --- Et quia omnis motus indiget subiecto --- sequitur quod productio universalis entis a Deo non sit motus nec mutatio, sed sit quaedam simplex emanatio.
- (8) Ibid.: Patet ergo quod hoc quod Aristoteles hic probat, quod omnis motus indiget subiecto mobili, non est contra sententiam nostrae fidei: quia iam dictum est quod universalis rerum productio --- non est motus nec mutatio.
- (9) Ibid.: Ex hoc ergo quod omne particulare agens praesupponit materiam quam non agit, non oportet opinari quod primum agens universale, quod est activum totius entis, aliquid praesupponat, quasi non causatum ab ipso. Nec hoc etiam est secundum intentionem Aristotelis.
- (10) Cf. Van de Couesnongle, *La causalité du maximum*. *Revue des sciences philosophiques et théologiques*, t. XXXVIII, pp. 443-444; pp. 658-680.
- (11) In VIII *Phys.*, lect., 2, n. 974: Probat enim in II *Metaph.*, quod id quod est maxime verum et maxime ens, est causa essendi omnibus existentibus: unde hoc ipsum esse in potentia, quod habet materia prima, sequitur derivatum esse a primo essendi principio, quod est maxime ens.
- (12) Ibid., n. 975: Postremi vero, ut Plato et Aristoteles, pervenerunt ad cognoscendum totius esse.
- (13) これらの著作年代については未だ決定的な線が出ていないとされているが、ここでは一応 F. van Steenberghen に従った。
- (14) Plato, *Resp.* 508. B-509 B.
- (15) Cf. A. C. Pegis, *A Note on St. Thomas, Summa Theologica*, I, 44, 1-2. *Mediaeval Studies*, Vol. VIII, 1946, pp. 159-168. この問題については、アリストテレスに所説に潜在しているところを、トマスが自らの責任において顕示したとする

- 見解は、G.-Lagrange, E.Gilson その他諸家の一致して認めるところであるが、特にR.Jolivetが question de droit と question de fait との綿密な吟味を経て立証していることはよく知られている。cf. R. Jolivet, *Essai sur les rapports entre la pensée grecque et la pensée chrétienne*, Paris, 1931, pp.1-81.
- (16) Cf. E.Gilson, *Le Thomisme*, 4^e éd., Paris, 1947, p.190 n.1; *L'esprit de la philosophie médiévale*, 2^e éd., Paris, 1948, pp. 69-71, n.1.
- (17) Cf. 9)
- (18) Cf. 11)
- (19) Cf. 8), 6), 11).
- (20) In VIII Phys., lect.2, n.974: Sicut ergo si intelligamus rerum productionem esse a Deo ab aeterno, sicut Aristoteles posuit, et plures Platoniorum, non est necessarium, immo impossibile, quod huic productioni universali aliquod subiectum non productum praeintelligatur.
- (21) Plato, *Timaeus*, 48 E-51 B.
- (22) *Arist., De Generat. et Corrupt.*, B, 10, 336a 31-34
- (23) *Arist., Phys.*, A, 7; 190^b1-4
- (24) *Summa Theologiae*. I, 44, 2, ad, 1: Philosophus in I Phys., loquitur de fieri particulari, quod est de forma in formam, sive accidentalem sive substantialem: nunc autem loquimur de rebus secundum emanationem earum ab universali principio essendi. A qua quidem emanatione nec materia excluditur, licet a primo modo factionis excludatur.
- (25) In I Sent., d.37, q.1. a.1: Sicut enim dicit Avicenna, haec est differentia inter agens divinum et agens naturale est tantum causa motus, et agens divinum est causa esse. cf. I, d.7, q.1, a.1, ad3; d.9, q.2, a.1, obj.1; d.42, q.1, a.1; II, d.1, q.1, a.2, ad 1; d.15, q.1, a.2; d.15, q.3, a.1, obj.1; *De Veritate*(1256-1259)q.2, a.3, ad 20. Avicenna, *Metaph.*, VI, 1, Venetiis, 1508, fol.91rb; Algazel, *Metaph.*, I, 8, ed. J.T. Muckle, Toronto, 1933, pp. 47-51. cf. E.Gilson, *History of christian Philosophy in the Middle Ages*. New York, 1955, pp. 210-211; 643-644; W. Dunphy, *The Similarity Between Certain Questions of Peter of Auvergne's Commentary on the Metaphysics and the Anonymous Commentary on the Physics Attributed to Siger of Brabant*, *Mediaeval Studies*, vol.XV, 1953, pp.159-168; A. Maurer; *John of Jandun and the Divine Causality*, *Mediaeval Studies*, vol.XVII, 1955, pp.185-207.
- (26) *Summa Theologiae* I, 44, 2, Resp.: Et ulterius aliqui exererunt se ad considerandum ens in quantum eius: et consideraverunt causam rerum non solum secundum quod sunt haec vel talia, sed secundum quod sunt entia. Hoc igitur quod est causa rerum in quantum sunt entia, oportet esse causam rerum, non solum secundum quod sunt talia per formas accidentales, nec secundum quod sunt haec per formas substantiales, sed etiam omne id quod pertinet ad esse eorum quocumque modo. Et sic oportet etiam materiam primam ponere creatam ab universali causa entium.
- (27) *Resp. ad Fr. Ioan. Ver. de Articulis XLII*, a.33: Nec video quid pertineat ad doctrinam fidei sed qualiter Philosophi verba exponantur.